

奈良に古くから伝わるむかしばなしを紹介します。



孝女伊麻像

葛城市立磐城小学校の正面玄関脇にたつ像。手に灯りを持ち水甕の中を覗こうとする伊麻の姿。



水甕

鯉が入っていたとされる水甕。松尾芭蕉もこれを見たといわれ、親孝行の話に深い感銘を受けた。水甕は今も箱に入れられ大切に保管されている。

孝女伊麻と鯉



文・山崎しげ子

今回は、今市村(今の葛城市南今市)に実在したといわれる親孝行な姉弟のお話。姉の伊麻と、弟の長兵衛。
寛文十一年(二六七二)の夏、疫病が流行した。姉弟の父も病に倒れ、食事も取れずに衰弱していた。二人は昼夜を問わず介抱に努めたが、一向に良くならなかった。
ある時、鯉が病気に良いと聞き、二人は急ぎ八方手を尽くして鯉を求めた。だがなかなか見つからない。
二人が途方に暮れていると、夜、水甕の中で何やら音がした。灯りを近づけて中を見ると、何と、大きな鯉が泳いでいるではないか。
二人は喜び、さっそく調理して父に食べさせた。すると、父の病気はぐん

追善法要

(2月27日)
伊麻の命日、2月27日に「孝子碑」前の広場で行われる。磐城小学校の児童と附属幼稚園の園児らが大勢お参りし、親孝行や思いやりの心を学ぶ。



孝女伊麻旧跡

伊麻の住居跡と伝える所にたつ「孝子碑」。天保11年(1840)に姉弟の徳を称え郷土の誉れとして顕彰された。今も供花が絶えない。



ぐんと快方に向かい、やがて平癒したという。
この親孝行な伊麻のお話は、当時、相当有名であつたらしい。
伊聖、松尾芭蕉も、この話を聞き、貞享五年(二六八八)四月十二日、『笈の小文』の旅の途中、わざわざ伊麻に会いに訪れている。鯉の話から十七年がたつていた。
芭蕉が伊賀の弟子の遠藤に送った書簡によると、芭蕉はその時、鯉のいた水甕も見せてもらい、藁筵の上で茶や酒のもてなしも受けた。当の本人から直接話を聞き、その孝義のまことに触れて非常に感激した。
芭蕉に同行していた弟子の万菊も深く心を打たれ、感涙を抑えきれな

物語の場所を訪れよう



「孝女伊麻旧跡」(葛城市南今市)へは…
近鉄南大阪線「磐城」駅下車。南へ約800m。現徳寺の北側。
葛城市企画政策課 ☎0745-69-3001(代)

かつた。ちょうど衣替えの季節でもあり、衣類を売って得た代金を、志として伊麻に贈ったという。
その四年前、芭蕉は『野ざらし紀行』の旅で當麻の竹ノ内村にしばらく滞在した。その時に伊麻の話を聞いたのではないかと、言われている。
実は、当時、徳川幕府は儒教の教えを重んじる政策を推進していた。孝子(親孝行な子ども)を称える風潮が諸国に広まっていたようだ。
この美談は、今も語り継がれている。「孝女伊麻像」や「孝子碑」などが残る。二月二十七日に営まれる「追善法要」では、小学校の児童、地域の人々がお参りに訪れ、近くの現徳寺で「徳」についての講話もある。